# 浦島太郎は生きていた

はくび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
浦島太郎は生きていた

【Ｎコード】
Ｎ７１７９Ｎ

【作者名】
はくび

【あらすじ】
玉手箱の煙により深い眠りについた浦島太郎が、現代になり、ついに目覚めた。「竜宮城で、私は乙姫様に恋をしました。気品溢れるあの方は、手厚く私を歓迎してくださいました。しかしそんなあなたが、なぜこの私に玉手箱を渡されたのか？」その真相を知るべく、浦島は竜宮城を探す旅に出る。

# 第1話　浦島太郎は生きていた

人が立ち入らぬ山の奥深く。
男は静かに目覚めた。
「う、う～～ん　ここは、どこだ??」
視界がはっきりしない。
「かすかに風でざわめく木々の音が・・　森の中なのか?」
周りを見回すと、5メートル四方の空間だった。
壁は土で固められている。
所々にあるわずかな穴から太陽の光が差し込んでいた。
「なんだここは?　なぜ自分はこんな場所に・・」
男は自分の顔に手を触れた。
そして、長い髭があることに驚く。
それも普通の長さではない。
足先まで達するほどであった。
手には深いシワが多く刻まれている。
「いったいどういうことだ?　私は老けてしまったのか?」
声も老人のようであった。
悪い夢でも見ているのかと思った。
その時、近くで人の気配が。
「うう・・　頭がいたい・・」
「何だここ??」
別の二人が目を覚まし、上半身を起こした。
彼らも男と同じく老人の姿をしていた。
それだけではない。
風貌といい、一際目立つ長い髭といい、似ている箇所が多かった。
自分に似た人間が二人も近くで寝ていたことを知り、まったく無警戒だった男は驚きの表情。
互いに顔を見合わせる。

「誰だ？　あんた」
「あなたこそ誰なのですか？」
誰もが呆気にとられた様子だった。
そこへ、またしても新たな老人が現れた。
その老人は部屋の奥の階段から降りてきた。
三人を前にして目を丸くする。
老人「おお！　ついに目覚めたのですな！」
状況が飲み込めない三人。
男「あなたは誰です？」
老人「私のことより、あなた方は自分の名前を思い出せますかな？」
男「名前は・・　浦島太郎」
老人「ほう」
男は、あの浦島太郎であった。
横にいた二人がそれを聞き驚く。
「なに！？　浦島だと！？」
彼らは浦島の顔をのぞき見る。
老人は二人に向かっても同じ質問をした。
「お前さん方の名前は？」
「俺か？　金作！」
「俺は銀作だ」
二人の言葉に今度は浦島が驚く。
浦「金作に銀作だって！？」
金「当たり前だろ」
銀「しかし俺達なぜこんな老人の姿に・・」
三人は自分達の体に戸惑いを隠せない様子。
老人「ほほう。どうやら記憶はしっかりしているようだな」
浦「あなたはいったい！？」
金「そうだ！」
銀「俺達に何をした？」
浦島、金作、銀作の三人はその老人を疑った。

老「私の名前は銅次郎。長い年月の間、お前さん達を見守り続けてきました」
浦「見守る？」
銅「はい・・」
浦「どういうことです？　それにここは何処なのですか？　なぜ私達がこのような場所に」
銅「ふむ。そこまでは記憶にないご様子。分かりました。お話しましょう」
銅次郎は軽く咳払いをした。
銅「遥か昔のこと・・　あなた方は深い眠りにつきました」
金「眠り？」
銅「思い出せませんか？」
銀「ううん・・　思い出せない」
浦「思い出しました！　玉手箱ですね？」
銅「その通り。あなた方は玉手箱を開け、中から噴き出した煙によって長い眠りにつきました」
銅次郎の話で浦島達の記憶が呼び起こされてきた。
金「思い出したぞ！　浦島が持っていた箱を開けて、この俺も」
銀「そうだそうだ！」
銅「古いことですが、思いだしたようですね」
浦「古いといっても西暦４００年のことです」
銅「その通り。だが、今が何年だか想像できるかな？」
浦・金・銀「今！？　今って・・」
銅「現在は２０１０年です」
浦「２０１０年！？」
金「バカな！」
銀「では俺たち１６００年以上も眠っていたとでもいうのか！？」
銅「その通りです」
浦「信じられない・・」
銅「無理もないでしょう」

浦「本当だとしても、それだけ長い間無事に生きていられたなんて・・」
銅「それは私が、いえ正確には我が家系が代々よりあなた方を見守り続けてきたから。私どもは竜宮人の命により、あなた方の監視を使命としてきました。そして人の目につかぬこの場所で、長きに渡りかくまい続けました。目を覚ますその日まで・・　そして、今日その日が来たのです」
三人は頷きながら話を聴いた。
銅「あなた方の話も先祖より代々聞き継がれてきました」
銀「そうだったのか」
銅「はい」
金「俺達がヨボヨボになっている理由は・・」
銅「そう・・　すべて煙によるもの・・」
浦「なるほど。ですが、なぜ玉手箱にそんな煙が・・」
銅「それは分かりません」
浦「そうですか・・」
そこで突然金作が声を荒げた。
金「おい浦島！　そもそもお前があんな箱を持ってきたから俺達までこんな目に！」
銀「そうだぞ。お前の責任だ！」
浦「それは分かっているが、私だって玉手箱の中にそのような煙が入っているなど聞かされていなかったのだ。なぜ乙姫様はあのような箱を・・」
金「お前、乙姫っていうヤツに恨まれていたのでは！？」
浦「そんなことは絶対にない。私は乙姫様から、贈り物として玉手箱を受け取った」
銀「そいつが悪魔の回し者かもしれん」
浦「それもない。乙姫様はとても気品に満ちた人で、温かく私を歓迎してくださった。竜宮城では夢のような時を過ごした・・　そんな記憶があるんだ」

金「気にいらねーな」
銀「俺らは何の待遇も受けていないばかりか、不幸だけ被らされたというわけか」
そこで話を聞いていた銅次郎が口を開いた。
銅「私も乙姫様は悪人ではないと思います。なぜなら、こうやって私どもにあなた方の監視役をさせた。悪意があったらそんなことはしないでしょう」
浦「私もそう思います」
金「そんなことよりも、これから俺らはどうなるのだ!?」
銀「まさかこの姿のまま一生・・　うっかりくたばり兼ねない年齢だぞ」
金「そんなことは許さないぞ!　なあ銅じいさん!　玉手箱というものは残っていないのか?」
銅「残念だがそれは・・」
金「ならば俺達が煙を吸った場所を探そう!」
銅「それならば、ここから2キロほど離れた海岸です」
金「近いじゃないか。よし!　そこへ連れて行ってくれ!」
銅「よろしい」
彼らは銅次郎に先導され、外へ出ることにした。
浦「しかしここはいったい・・」
銅「先祖から代々ねぐらとしてきた場所です。とても頑丈な上に人から見つかりにくい。身を隠すには最適というわけです」
ふと銅次郎が立ち止まる。
銅「お前さん達、これを使いなさい」
手渡されたのはナイフであった。
それで髭を切り、髪を切り、体毛などを剃った。
そして細い階段を数段上がると、ようやく狭い空間から解き放たれた。
眩しい太陽光が彼らを照らす。
目を開けられなかった。

体も鈍ってしまい思うように動かない。
１６００年も眠っていたのだから無理もなかった。
次に銅次郎は近くから薪を集め、火を焚くと、食事の準備を始めた。
十分ほどで飯を作った。
浦「これは美味しい」
金「うめえ。生き返る」
銀「１６００年ぶりの飯か」
浦「飯もまったく食べずに生きていたのだな。私達・・」
銅「おそらく玉手箱の煙の不思議な力によるものでしょう。寝ているあなた方は、まるで死んでいるかのようでした。呼吸もしていない。本当に生きているのか？　それすら疑わしい状態でしたが、我々はあなた方を信じ待ち続けました」
浦「感謝しています」
銅次郎は静かに頷いた。
そして空腹を満たすと。
金「よし。じいさん案内してくれ」
銅「では参りましょう」
三人は銅次郎の後に続いて山道を下った。

しばらく道なき道を進むと、やがて木々の隙間から海が見えてきた。
ねぐらを出発して、およそ1時間で海岸に着いた。
銅「ここがあなた方の倒れていた場所。淋代海岸です」
金「かすかに覚えているぞ」
銀「確かにここだ」
浦島たちは１６００年前に記憶をさかのぼらせた。
金「まず俺と銀作がこのあたりで亀を見つけた！」
銀「緑色の。それもとびきりデカイやつだった」
金「しかもこいつが喋るんだ！」
銀「ああ。あれには驚いたぜ」

金「面白いから色々な言葉を言わせて遊んでいたんだ」
銀「亀は迷惑そうだったが」
そこで浦島の出番。
浦「それを見た私が二人を止めに入った。そして亀を助け海まで連れてゆくと、亀は私に礼を言い帰って行った」
銅次郎は興味深そうに聞いている。
浦「しかし私はその後もその亀の事が気になっていた。とても不思議だったから」
金「確かにあんな亀見たのは初めてだった」
銀「俺もだ」
浦「その事が忘れられず、私は数日後、再びこの海岸に来た」
金「ほう」
銀「そこで何が起きた？」
浦「すでに日は沈み、満月の明かりが海に反射して煌めいていた。ちょうど亀を助けたあたりに来たときだ。どこからか声がした。『もしや、そこのあなたは』と」
金・銀・銅「まさか」
浦「私はすぐに分かった。あの亀だと。予想通り浅瀬に亀の姿があった。私は駆け寄り話を聞いた。亀は『先日はありがとうございました』と私に礼をした。私は自分の名を名のり、亀の事も聞いた。岩のように頑丈で大きいから亀岩と呼ばれているそうだ。先日のことを聞くと、昼間に陸に上がったのは失敗だったと言っていた」
金「なぜ？」
浦「亀岩は陸にいられる時間が限られている。だから人の少ない夜を選んで陸に上がるのが普通らしいのだ。しかしその日は昼に・・運悪く金作と銀作に見つかってしまい身動きが取れない状況に。あのままでは死んでいたかもしれないと話していた」
金「悪いのは亀岩の方だ」
銀「そうそう。俺達は悪くない」
浦「それはさておき、亀岩は私に本格的な礼がしたいと言い出し、

竜宮城に招待してくれるという」
金「あの亀にそんなことが・・」
浦「私は言われるがまま亀岩の厚い甲羅の上に乗った。すると私を乗せ海に潜った。外は暗い。もちろん海中ともなれば光などなかった。そのためか恐怖で一杯だった。しかし不思議と海中でも息ができたのだ。その時私の周りを不思議な泡が包み込んでいた。おそらくそのためだと思う」
銀「それで？」
浦「視界は真っ暗だから、周りの景色、それにどこへ向かおうとしているのかはまるで見当が付かなかった。しばらく行くと、漆黒の闇だった海底にわずかな光が見えてきた。光は次第に大きくなり、やがて目の前に巨大な城が現れた。珊瑚に埋め尽くされ、目も眩まんばかりの光を放ち・・」
金「まさか・・」
銀「それが・・」
銅「竜宮城？」
浦「はい。私は城内に通されました」
金「ちょい待った！　お前の話はあらかた分かった。そこで夢のような一時を過ごしたとでも言いたいのだろう？　だが俺達はお前のウハウハ話を聞きたいわけじゃない」
銀「そういうことだ」
浦「それが・・　不思議なことに竜宮城の中はあまり記憶にないのだ。どんな人がいたか、どんな料理を出されたか、かすかにしか覚えていないのだ・・　ただ、とても豪勢だったことは間違いない。私はそこで乙姫様と幸せな時間を過ごした。しかし地上に帰る時が来た。私は竜宮城に住みたいと願い出た」
金「なに！？」
浦「しかし許しは出なかった。そこは竜宮人の住む世界。人間は住む事は愚か、立ち入ることすら本来出来ない場所なのだ。それを聞き、私は諦めた。しかし帰り際に乙姫様は私に玉手箱を手渡された。

亀を助けた礼と言っていた。私は亀岩に乗り、この海岸に戻ってきた。その時、外は明るかった。いったいどれくらい竜宮城にいたのか？　それすら分からなかった。時間の感覚というものがなくなっていた」
銅「不思議な話だ」
浦「ええ。これは全て現実に起きたことでした。その証拠に竜宮城から戻った私の腕には、しっかり玉手箱が握られていました。私はしばらく箱を眺めていました。そこへ金作と銀作が現れたのです」
金「すぐお前だと分かった」
銀「確かあれは、俺達が最初に亀を見つけた日の１週間後くらいだった」
浦「そうか。つまり私は４，５日竜宮城にいたわけか」
金「俺はお前が持っていた玉手箱に興味を持った」
銀「そうそう。とても美しい箱だったからな」
浦「私は金作と銀作に玉手箱の事を話した。そして二人にせがまれ、その場で開けてみることに。しかし中には何も入っておらず、煙がモクモクと立ち込め・・」
金「それっきりだ」
銀「眠りについてしまったわけだな」
浦「そう。それからおよそ１６００年の眠りについた・・」
三人の話を聞いていた銅次郎。
銅「話はよく分かりました。驚いたことに、我が代々の言い伝え通りでした」
浦「本当ですか？」
銅「はい」
金「おいちょっと待て！　肝心なのは俺達がこの先どうするかってことだろう！？」
銀「そうだよ！　この時代には親もいないし・・」
銅「そう焦ることはない。最初は色々と戸惑うかもしれんが、自由にすればよい」

金「自由にと言われても、俺達こんなじいさんになってしまったんだぞ！？　走ることすらできない。このまま衰弱死してしまいそうだ」
銀「この体で何ができるというのだ？」
銅「そこまで私は指図いたしません」
浦「これからは私達の力で生きて行かねばならないということですね」
銅「そういうこと。こうして奇跡的に目覚めることができたのだ。命を無駄にせんようにな」
そう言うと、銅次郎は山へ引き返そうとした。
しかし途中で振り返り。
銅「そうだ。ひとつ言っておく。この時代は文明というものが発達している。お前さん方が生きていたころとは全てが別物であろう。街に出ても問題が起きるだけ。しばらくは控えた方が賢明だろう」
浦島たちは真剣な面持ちで聞いた。
銅「あと人間にも注意するのだ。この時代ではお前たち三人、特に浦島太郎は架空の人物として広く名が知れている。もし本人と知られたら大騒ぎになることは明確。混乱を招かないためにも、人間に接する時は注意するのだ。よいな？」
浦「分かりました」
銅「よし。では私は戻るぞ。それから、ねぐらへはいつ戻ってきても構わんぞ。飯なら好きなだけ食わせてやる」
浦「ありがとうございます」
銅「無理はせんようにな」
そう言い残すと銅次郎は山へ帰って行った。
海岸に残された三人は、しばらくそこに立ち尽くしていた。

## 第1話　浦島太郎は生きていた（後書き）

次話→９／１４（火）予定

## 第2話　助っ人

海岸に立つ三人は互いに顔を見合わせた。
銀「なあ金作、俺たちこれからどうする？」
金「そんなこと知るか！　おい浦島！　どうするつもりだ！？」
浦「どうするって・・」
金「責任を取れ！　全てはお前が持ってきた玉手箱のせいじゃないか！」
銀「そうだ！　俺達をあの時の子供の状態に戻せ！」
浦「そんなことを言われても・・」
金「さもないと許さないからな！」
浦「確かに玉手箱を持ってきたのは私だ。しかし責任はお前たちにもあるはず」
金「口答えか？」
一向に聞く耳をもたない金作たち。
口論はしばらく続いた。
金「ハアハア。ダメだ。少し声を荒げただけで息切れする。老人の体ではまともなことはできそうにない」
銀「少し落ちつこうぜ金作」
金「何か手立てを考えるぞ。このままくたばってたまるか！」
銀「そうだな」
金「先決なのは、やはり竜宮城を探し出すこと。そこには俺達を若返らせる方法があるに違いない」
銀「そうだな」
金「しかし海底のどこにあるかも分からぬ場所に行くのは不可能。だから・・そうだ！　玉手箱を探そう。見つかれば何か手がかりをつかめるかもしれない」
銀「よし分かった」
金「おい浦島！　始めに言っておくぞ！　今後はお前が率先して動

くんだ！　それから俺達の指示には従ってもらうからな！」
浦「分かったよ金作・・」
抵抗しても無駄と分かっていた。
それに浦島も竜宮城を探し出し、もう一度訪れたい。
その気持ちは金作と変わらなかった。
玉手箱の探索が始まり、三人は海岸付近をくまなく探した。
土や砂を掘り起こし、森林に入っては木や草の陰などを細かく見て回った。
玉手箱はとても美しい箱。
あればすぐにでも気付きそうなものだ。
しかし一向に見つかる気配はなかった。
無理もない。
かれこれ１６００年前の出来事である。
誰かが持って行ったか、波にさらわれてしまったかもしれない。
見つかる方が奇跡である。
銀「ぜんぜん見つからない」
金「くそっ。やっぱり無理か・・」
気が付くと夕暮れ時だった。
金「仕方ない。今日は諦めて、銅じいさんのねぐらに引き上げよう」
銀「そうだな」
そんな時、浅瀬に何かを見つけた。
海を見ていた浦島がそれに気づいた。
浦「おや？　あれは？」
金・銀「？」
指さす方向に目をやると、１メートルほどの黒い物体が。
浦島にはすぐ分かった。
浦「亀だ」
金「何だって！？」
言われてみると、それは確かに亀の甲羅である。
金作と銀作は逃がすまいと近づき、勢いよく飛びつくと、甲羅を掴

み持ち上げた。
予想以上に大きな亀だった。
亀「ウーー」
手足をバタつかせて暴れる。
二人は亀を陸に連れていった。
金「おい銀作！　こいつあの亀岩と同じ種類じゃないか！？」
銀「そうだな。この海岸に来たということは可能性あるぞ」
金「こいつをとっちめれば竜宮城に行けるかもしれねえ！」
銀「本当かよ！」
興奮する二人。
金「おい亀！　俺達を竜宮城に連れて行け！　おい何か答えろ！」
亀は海に戻ろうと必死である。
銀「どうやらダメそうだ。喋る気配もないし・・」
それを見た浦島が駆け寄った。
浦「おい待て！」
金「なんだよ」
浦「これは亀岩ではない！　大きさがそもそも違うではないか」
金「くそっー」
金作は再び亀を掴むと、海に放り投げた。
浦「な、なんてことを！」
浦島は亀を気遣った。
どうやら怪我などはなさそうだ。
それを確認すると海に返した。
そして二人の元に近づき。
浦「お前たちはあの時とまったく変わっていない。もっと生き物を大切にしろ」
金「なんだと！？　おい浦島、俺に何度も同じ事を言わせるな！態度がデカイぞ！」
一方銀作が海を見ていると。
銀「おい金作！　あそこにも亀が」

金「なに！？」
金作が駆け寄り、先ほどと同じように持ち上げてみるが・・
喋らない上に亀岩に比べると小柄だ。
金「これもダメか！」
またしても亀を乱雑に投げ捨てる金作。
浦島は思わず目をそむけた。
銀「くそっ」
金「でも分かったぞ。どうやらここは亀が集まりやすい場所のようだ」
銀「産卵地なのか？」
金「分からないが、待っていればいつか亀岩が現れるかもしれない」
銀「そうだな」
金「おい浦島！　今日のところは俺達、銅じいさんの所に戻るから、お前はここで一晩見張っていろ！」
浦「ええ？」
金「もし亀岩が現れたらすぐに知らせに来いよ。いいな！？」
銀「そういうことだ。分かったな浦島。今度もお前一人で竜宮城に行ったりでもしたら許さないからな」
浦「わ、わかった・・」
やむなく引き受けた。
金「よし銀作行くぜ」
銀「おう」
浦島は海岸にひとり残ることになった。
大きく息を吐き気持ちを落ち着ける。
しばらく海を眺めていた。
浦「もしまた亀岩に会えて再び竜宮城に行くことができれば、乙姫様が私に玉手箱を与えた真意が聞けるはず。絶対に諦めないぞ」
身体的な疲労はあったが、辛くはなかった。
時間が経つにつれて、亀の姿が多く見られるようになってきた。
浦「暗くて見づらいが、月明かりが頼りだ」

目を凝らして一匹一匹見てゆく。
浦「どの亀も小柄だ。亀岩ではない・・」
浦島は休むことなく見張り続けた。

翌朝。
金「なに！？　来なかった？」
浦「ああ・・　ずっと見ていたが」
銀「うーん」
二人は頭を抱えた。
金「まだ諦めるのは早い。こうなったら根気勝負だ。全員で探すぞ」
銀「ふー」
それから数日間、三人で協力し亀岩を探し続けた。
夜は浦島が一人残った。
しかし日を重ねても結果は同じどころか、次第に海岸に見せる亀の姿も少なくなっていった。
一週間後には金作と銀作も諦めたのであろうか。
海岸にすら姿を見せなくなった。
浦島は一人になってからも何処に行くわけでもなく、ぼんやり海を眺めていた。
腹が減ると山で木の実を取り、銅次郎の世話になることもあった。
亀岩は果たしてこの時代にもいるのだろうか。
序々に不安が募った。

そんなある日。
久々に金作と銀作が海岸に姿を見せた。
それも見知らぬ男を引き連れ・・
金「よう浦島。相変わらずって顔だな」
浦「ああ・・　まったくダメだ」
金「そう思ったぜ。だから心強いパートナーを連れてきたって訳だ」
浦「いったい誰なのだ？」

浦島の問いに同行してきた男の一人が答えた。
男「我々はこの海域を中心に海底調査などをしているチームで、私がリーダーを務めています」
別に二人の男がいた。
どういうことなのか、浦島には状況が理解できない。
リーダー「海底の調査については我々ができる限りの協力をします」
浦「え？　しかしなぜあなた達が？」
金「おい聞いたか浦島。彼らは海底の調査を専門に仕事しているらしい。もしかしたら竜宮城を探し出すこともできるかもしれないだろ？」
浦「本当か？」
金「ああ。いつまでも海岸で待っていても時間の無駄。だったらこちらから乗り込もうって訳よ」
浦「そんなこと出来るのか？」
金「それは彼らの力とお前の記憶次第だ。いいか！？　できる限り詳しく竜宮城の場所を思い出せ！」
浦「分かった。できる限りのことはしてみるよ・・」
金「よし」
リーダー「では明日の朝出発でよいかな？」
金「頼むぜ！」
三人は希望を膨らませた。

## 第2話　助っ人（後書き）

次話→9／17（金）

## 第3話　嵐の夜

翌朝。
浦島ら計六人を乗せた船が近くの港から出航した。
この時代の船というものに、三人は興味津々であった。
甲板に立ち、空気を胸いっぱい吸う。
金「なんて快適なんだ！」
しばらくして陸は見えなくなった。
浦「驚いた・・　人力を使わずにこれほどの速度が出るなんて」
金「これが銅じいさんの言っていた文明の力というやつか」
銀「これは期待できそうだ」
興奮する三人。
ふと浦島は疑問に思っていたことを聞いた。
浦「しかしなぜ彼ら、この時代の人が我々に力を貸してくれたのだ？」
金作と銀作が成り行きを説明した。
銀「俺達がお願いしたのさ」
金「そう。いつまでも海で亀岩を待っていても埒が明かないからな。俺達はまず山を出て街を探した。ようやく見つけた街で情報を収集をした」
銀「だが誰も亀岩のことを知っているやつはいない」
金「仕方なく亀の事は諦め、このあたりの海に詳しい人物は誰かと尋ねたら、彼らに辿りついたという訳だ」
浦「なるほど」
銀「しかし彼らでも亀岩のことは知らないと・・　おそらくこの時代にはいないのだろう」
金「次に竜宮城について聞いた」
銀「すると驚くことに、彼らは竜宮城を知っていた！」
金「だが場所までは分からないと・・　どうやら童話の知識らしい。

俺達はそれが実在することを話し、探す手伝いをしてほしいと頼んだが、なかなか首を縦に振ってくれない・・」
銀「海底調査には結構な費用がかかるらしい」
金「だがそれで諦めてはいられない。俺は奥の手でお前の名前を出した」
銀「そうしたら途端に了解を得られたわけだ」
金「驚いたぜ。浦島の名前を聞いた時の彼らの顔には」
銀「銅じいさんの言っていたことは嘘でなかった」
金「腹が立つのは、俺達の名前は誰も知らないってことだ」
銀「まったくだぜ」
それを聞いていた浦島は危惧した。
浦「私の名を出したのか！？　それは銅じいさんから止められていたではないか！」
金「時と場合によるさ。もっとも今回はそのお陰でこうして協力してもらえたのだ」
銀「そうそう。これで竜宮城が見つかれば何の問題もないだろ？」
浦「不安は残るが・・」
何事もないことを祈る浦島であった。
金「それより竜宮城の場所は思い出したのか？」
浦「そ、それは・・」
言葉につまった。
そして小さな声で。
浦「どうしても思い出せないんだ・・」
銀「なに～？」
浦「必至に思いだそうとするのだが、１６００年前のあの時は、夜だったということもあって海中は暗闇。どの方角に進んでいたのか。どれくらいの距離進んだのかすらも見当がつかない状況だったから・・」
金「おい待ってくれ。俺達が竜宮城に行けるかは、お前の記憶にかかっているんだぞ！」

浦「わ、分かっているが・・」
そこへ調査チームの三人が姿を見せた。
リーダー「あなたが浦島さんですよね？」
明るい表情で浦島に近づく。
リ「本当に、本物の浦島太郎さん？」
浦「はい。そうです・・」
自分の正体は、すでに彼らには知られているので、今さら隠すことはしなかった。
リ「信じられません。まるで夢を見ているようだ」
浦「皆さんにはご協力感謝しています」
リ「気にしないでください。それより竜宮城は本当に存在するのですか？」
浦「それは私が保障します。この目で見てきました」
リ「驚いた～　ぜひ私も見てみたいです。我々の手で見つけましょう！」
浦「はい。私も出来る限りのことはします」
リ「ええ」
リーダーは顔を輝かせた。
浦「たった今竜宮城の場所を思いだそうとしていました。しかしかなり記憶が曖昧で、とにかく深く深く潜ったという感覚しか覚えていないのです」
リ「そうですか。分かりました。でも気を落とさないでください。この船は小さくて頼りなさそうですが、様々な機械が搭載されています。超音波を使って海底の様子を調べることもできます。竜宮城が実在することが分かれば、あとは徹底的に調べるだけです」
浦「心強いです」
リ「そうだ。浦島さんにこれを渡しておきます」
リーダーはある照明器具を手に。
リ「それは海上用のサーチライト」
浦「サーチライト？」

リ「はい。小型ですが光は強力です。暗くなった時など、海面や遠くの様子を探るのに使えます。防水性にすぐれている他、太陽電池を使っているので、日中の太陽光で電力を補充することもできます。なので当分は電力切れの心配はありません。ぜひ使ってください。もし海に異常があった時は知らせてください。それから何か思い出した時も」
浦「分かりました。ありがとうございます」
機械の説明はまるで分からなかったが、ひとまず礼を言った。
リ「我々は船内に戻りますので、外のことは皆さんにお任せします」
浦「はい」
リ「では」
彼らは船内に戻って行った。
浦島はしばらくサーチライトを見つめていた。
おや？
ライトの隅に小さな文字が。
『しんかい２０００』
浦「しんかい２０００？」
銀「ああ。この船の名前らしい」
浦「そうなのか」
金「たいそうな物を預かったものだな。おい浦島。分かっていると思うが、お前は夜も休まず海を見張るんだぞ。寝たら許さないからな」
浦「言われなくても分かってる」
責任感はあった。

そして夜になると、浦島はライトで海面を照らした。
強力な光に驚いた。
浦「これは凄い！」
しばらく海の様子を観察しながら、過去の記憶を探っていた。
浦「やはり竜宮城のことは思い出せない・・」

浦島は記憶に頼ることを諦めた。

それから数日が過ぎた。
依然竜宮城に結び付く手掛かりはなかった。
その日、しんかい２０００は激しい暴風雨の中にいた。
大波で船は大きく揺れ、激しい雨が船体を打ち付ける。
この天候では調査は不可能とみて、浦島も船内に退避した。
だが船内に戻ったからといって、安心してはいられなかった。
あまりの揺れの激しさに物が倒れ、人も左右に振り回される。
「うわあああ！」
誰もが危険を感じた。
そしてその時は訪れた。
しんかい２０００は荒れ狂う波に船体を維持できず転覆した。
内部は停電になり、パニック状態となった。
窓ガラスが割れ、大量の水が浸入してきた。
リーダー「みんな落ち着いて！！」
金「浸水だ！　どうすれば！？」
銀「このままだと沈没するー！」
浦「ダメだ・・　私はもう動けない・・」
リーダー「諦めないで！　ひとまず浦島さんたちはあの救命ボートまで急いで！」
リーダーの指さす先にはやや小型の赤い救命ボート。
金作と銀作は真っ先にボートに向かい泳ぐ。
そして逸早く救命ボートにしがみついた。
だが浦島にはここ数日の疲労が蓄積していた。
浦「なんとかボートまで・・」
それでも必死にボートを目指した。
リ「浦島さん急いで！」
リーダーが浦島の援助に入った。

浦島の体を抱え、海水にみるみる満たされてゆく船内を泳ぎ、救命ボートまであと少しというところ。
だが金作が突如叫んだ。
金「ダメだ！　浦島を待っている暇がない！　脱出するぞ！」
銀「そうしよう！」
金作らは救命ボートを繋いでいるロープを外した。
ボートは荒れ狂う海に放たれた。
浦「ああ！」
リ「待ってくれー！」
呼びかけも空しく、彼らが戻ることはなかった。
リ「くそ！」
浦「おしまいか・・」
浦島の意識は遠のきつつあった。
リ「しっかりして下さい！」
そんな時もリーダーは冷静だった。
瞬時に閃いた最後の手段にでた。
リ「こうするしかない！」
近くにあった救命うきわ二つを浦島の体に通し、さらに浮力を得るためにリュックを手に取り、浦島の肩にかけた。
そして祈る気持ちでを浦島の体を割れた窓から船外へ突き出した。
リーダー「どうかご無事で・・」
数分後、荒れ狂う海はしんかい２０００を完全に飲み込んだ。

翌日。
街中のとある電気店の店頭に展示されているテレビの前に銅次郎の姿があった。
銅次郎「おや？」
ニュースが放送されていた。
アナ「ここで速報です。先日出航したとみられる、しんかい２００

０の行方が分からなくなっています。船には乗組員三人と、観光目的とみられる老人が三名が乗っていたと思われます。現在捜索が始まっています」
銅「老人三人・・」
浦島達から何も聞かされていない銅次郎は胸騒ぎを覚えた。
銅「まさか・・」
銅次郎はその足で海岸に向かった。
砂浜には浦島たちのものとみられる足跡は残っていなかった。
銅「ここ数日は海岸には来た形跡はない。つまり何処かへ・・」
ますます不安が募った。
その時上空をヘリコプターが三機ほど飛んで行った。
銅「きっと大丈夫だろう」
銅次郎は浦島たちを信じた。

## 第3話　嵐の夜（後書き）

次話→9／20（月）

## 第４話　漂着した島

しんかい２０００が消息を絶った数日後・・
浦島は静かに目を開けた。
浦「こ、ここはどこだ？」
そこは見知らぬ砂浜。
淋代海岸ではないようだ。
見渡す限り広がる海。
どうやら小島のようだ。
浦「私は生きているのか・・」
辺りには人のいる気配はない。
無人島のようだ。
浦「いったい何日海を漂っていたのだろう・・」
体には救命うきわが二つ。
浦「助かったのはこれのお陰か・・　そうだ。船は？　リーダー達は？」
海を探すが当然見当たらない。
浦「沈没してしまったのか・・」
彼らの安否が気になった。
だが今は自分自身が無事だったことへの安堵の気持ちで一杯であった。
浦「あの嵐の中助かったのは奇跡に違いない。全てはリーダーのおかげ」
浦島は感謝した。
ぼんやり海を眺める。
ふと遠くの海上に目をやった時、ある物体が目に入った。
浦「何だあれは？　人かもしれない！」
浦島は起き上がると、我を忘れて走り出した。
そしてがむしゃらに泳いだ。

近づくとそれが救命ボートであることが分かった。
浦「あれは金作達のボート！」
すぐに分かった。
ようやくボートまでたどり着き中を見ると、そこには二人が横たわっていた。
浦「おい大丈夫か！？」
金「う、ううん・・　こ、ここはどこだ？」
銀「お、俺達・・　生きているのか・・」
浦「よかった。無事のようだ」
金「浦島じゃないか。俺は幽霊でも見ているのか？」
浦「ひとまず話は後だ。私の力ではボートを引っ張ることはできない。海岸まで泳げるか？」
金「うん。なんとか」
銀「大丈夫だ」
浦島の力を借り、二人はボートから降りる。
体が海に落ちた。
そこから懸命に泳ぎ、なんとか海岸に着いた。
銀「この島は？」
浦「無人島のようだ。何処かは分からない」
金「そうか・・　それにしてもお前、よく無事だったな」
浦「死を覚悟したが、奇跡が起こったようだ」
銀「あの時はわるかった・・　お前を見捨ててしまって・・」
浦「ああ・・　もう過ぎたことだ。気にしなくていい。それより皆無事でよかった」
それについては咎めなかった。
しばらく休んでいるうちに、誰もが自分の置かれた状況を理解しはじめた。
金「なあ、どうやってこの島から出るんだ？」
銀「出られるのか？」
金「出るに決まっているだろ！　でなければここが俺達の墓場にな

ってしまう」
銀「舟を作るか？」
金「キツイぞ。海を渡れるだけの舟を作るのは」
銀「救命ボートでも無理か・・」
金「おい浦島、お前はどう思う？」
浦「そうだな。まずはここでしばらく様子を見ようと思う」
金「なんて呑気な」
銀「だが淋代海岸とここでは相当な距離があるだろう。自力で帰るのは無理そうだ」
金「仕方ない。しばらく考えよう。まずは食う物を探すことが先決だ」
銀「そうだな」
浦「森に入ればきっと何か見つかるだろう」
島の中央一帯は森林になっている。
三人は森に足を踏み入れた。

島を歩くと、改めて人の姿がまったくないことに気づく。
それどころか生き物の姿もない。
島の直径は約1キロほど。
迷うことはなさそうだ。
金「食えそうなものがないな・・」
銀「それにしても静かな島だ。聞こえるのは波の音くらい」
金「俺達がこの島の第一発見者かもな」
銀「こんなへんぴな島。見つけたところで・・」
金「最悪、草や木の実で食いつなぐしかなさそうだ」
銀「あとは救助を待つのみ・・」
ふと金作は浦島が肩に背負っているバッグのようなものに気が付いた。
金「おい浦島。それ何だ？」
浦「ああこれか？」

浦島はバッグを降ろし中を調べた。
そこには大切にしていたサーチライト。束になったロープ。そして非常食があった。
どれも緊急事態を想定したもの。
金「おお。飯があるじゃないか！」
三人は非常食に喰らいついた。
金「それにライトもあるとは！」
銀「これで助けを呼べるな！」
金「ああ！」
金作はライトのスイッチを入れた。
昼間なので多少分かりづらいがしっかり点灯した。
銀「おお。ちゃんと点くぞ」
金「浦島でかした」
浦「これらはリーダーが持たせてくれたものだ」
そのことを思い出すと浦島の気持ちは沈んだ。
食事を済ませ、久々の満腹感を味わった三人。
非常食はあっという間に底をついた。
救命ボートの時は浦島を置いて二人で逃げた金作と銀作。
だがこういう時は、飯を三等分しろと・・・
いつもながら図太い二人である。

金「さっそく俺達の存在を知らせるために最適な場所を探そう」
銀「なるべく高い所がいい」
その時浦島があるものを見つけた。
浦「あ、あれは！？」
遠くを指さした。
金・銀「！？」
その方向に目をやると、島の中央あたりにとてつもなく大きな木が見える。
周囲の木々に比べても、その木だけは際立って大きい。

遠くからも一目であった。
銀「何だあの木！　目の錯覚ではないよな？」
誰もが興味を抱いた。
金「行ってみようぜ」
銀「ああ」
浦「よし」
三人は謎の大木を目指した。

ようやくその根元に着いた。
見上げると高さは３０メートルはあろうかというほど。
浦「これは凄い・・　樹齢千年は超えている」
金「間違いない。この木の天辺が島で一番高い場所だろう」
銀「そのようだな」
すると金作が。
金「おい浦島。お前が行ってくれ」
浦「ま、まさかこの木に登れと言うのか？」
金「当たり前だろ？　お前がやるのが当然ってもんだ」
銀「浦島頼んだぜ」
無茶な指示にとまどう浦島。
しかし覚悟を決めた。
サーチライトを託されたのは自分だ。
自分が何とかしなければ。
そんな責任感を感じ始めていた。
浦「どうやって登るのだ？」
金「そうだな・・」
銀「いいこと思いついたぞ！」
金「！？」
銀「バッグに入っていたロープを使って、浦島の体を持ち上げよう」
金「やってみる価値はありそうだ」

その作戦が始まった。
浦島の体に巻きつけられたロープ。
それを枝に掛け、下の二人が全体重で引く。
わずかではあるが浦島の体が浮いた。
金「よし、いけるぞ！」
ロープの力だけでなく、浦島も自力で木を登った。
ロープの十分な長さにも助けられ、浦島は無事大木の頂上に到達したのだ。
そこからまわりを見渡した浦島は絶句した。
まさに絶景。
どこまでも続く澄みきった海。
島中の色とりどりな木々を一望できる大パノラマ。
ざっと見た所、近くに陸らしきものは見当たらない。
そして木の枝をよく見ると、さらに発見が。
頂上付近の枝には、至る所に果物が実っていた。
真っ赤なリンゴである。
浦島はひとつ取ってかじってみた。
実に美味しい。
金「おーいどうだー！？」
下から金作の声がする。
浦島は見下ろし。
浦「いい眺めだ！　それに果実がたくさん実っている！」
金「なに！？」
銀「本当か！？」
金「俺達にも分けてくれ！」
浦「分かった！　落とすぞ！」
浦島はいくつか取って下へ落とした。
それを受け取った下の二人は驚いた。
金「これは凄い！」
銀「リンゴじゃねえか！」

味見をして。
金「なんて美味いんだ！」
銀「しかもこんなにでかいリンゴ見たのは始めてだ！」
金「もしかしたらこれは神木かもしれないぞ」
銀「これで飢え死にの心配はなさそうだ」
金「おい浦島！　リンゴは沢山あるのか！？」
浦「数の心配はない！　ただ遠くのリンゴを取りにいくとなると、落下に気をつけないと」
金「それなら念のために、ロープで落下の危険がないようにするんだ！」
浦「そうか！」
浦島はロープを体に巻き、それを木に固定し、命綱代わりにした。
だがひとつ気づく。
浦「おーい金作！　降りるときはどうすればいいのだ！？」
金「降りるとき？　そうだな・・」
そこまでは考えていなかった様子。
そして金作の口から。
金「浦島！　お前はしばらくそこにいてくれ！」
浦「なんだって！？」
金「救助がくるまでの辛抱だ！　サーチライトを使えば誰かしらに気づいてもらえるはずだ！」
銀「リンゴがあるから空腹の心配もないだろう！？」
浦「無理があるだろ・・」
浦島は命綱を作ったことを後悔したが、考えてみればこの高さまで登ってきたものを、また降りるのも身がすくむ。
どのみち金作達の言うとおり、ここに留まる定めだったのかもしれない。
金「夜はその辺で適当に寝てくれ！　ただ見張りは怠るなよ！　あと俺達が空腹で来た時は、ちゃんとリンゴを落せよ！」
浦「まったく・・」

金「よし銀作行くとするか？」
銀「ああ。じゃあな浦島！　後は任せたぞ！　ハハハ」
高々に笑い、二人はその場から去って行った。
こうして浦島は大木の頂上に一人とり残されることになった。
しかし浦島のいる枝は表面が平らなうえに、十分な大きさと広さがあったため、もしかしたら寝られるかもしれないと思い、試しに横になった。
風は気持ちよく、ここが大木の上ということを意識しなければ、実に快適な場所であった。
浦島はそこでうつらうつら眠ってしまった。

## 第４話　漂着した島（後書き）

次話→９／２３（木）

## 第5話　絶体絶命

金「おーい！　浦島―！！」
銀「返事しろよー！」
浦「！」
その声で目を覚ました。
気がつけば陽は落ち、辺りは暗くなっていた。
金「腹減ったからリンゴを頼む！」
下を見ると二人の姿が。
手にはたいまつを持っていた。
その火がぼんやり灯っていた。
浦島はサーチライトを取りだし、二人の存在を確認した。
リンゴをふたつ取ると下に放った。
金「頂くぞ！　それよりお前寝ていただろう！？　ちゃんと見張れよ！」
それだけ言い足早に去って行った。
目をこすりながら浦島は体を起こした。
ライトの明かりを遠方に向けた。
ライトは未だに強力な光を放っていた。
電力が衰えている様子はなかった。
日中の太陽光で充電されていたのだろう。
浦島は持ち前の視力を活かし、海を見渡した。
どこまでも静かな海が広がっていた。
特別変わったことはなかった。
ライトの光を見れば、近くを通りかかった船が見つけてくれる可能性は十分にある。
そんな期待感を持った。
できることならば、しんかい２０００か乗組員の人達を発見できれば・・

時々そんな考えも。
食事はもっぱらリンゴのみ。
だが不満はなかった。
リンゴ一個で十分な満足感を得る事ができた。
それだけ格別な味わいのリンゴだった。

数日後の朝。
金作達がやってきた。
金「おい浦島元気にしているかー！？」
浦「金作に銀作！　久しぶりじゃないか！」
銀「生きていたか！」
金「毎晩見張りご苦労！」
銀「お前のライトは島のどこからでも見やすくて、方角を知るのに助かってるよ！」
金「それより何か見つかったか！？」
浦「これといって異変はない！」
銀「そうか」
浦「それより腹が減ったのだな？　リンゴ落とすぞ！」
リンゴをふたつ落とした。
金「おお、すまないな！」
浦「ところでお前たち、最近まったく姿見せないがどうかしたのか！？」
金「飯のことなら心配いらないぞ！」
浦「そうか。いったい何を食べているのだ！？」
銀「ハハハ。聞きたいか！？」
金「教えてやるよ！　最近色々と島のことが分かってきたのだが、どうやらこの島は夜になると亀が集まるようなんだ！」
銀「それもとんでもない数！　おまけにビッグサイズときたもんだ！」

浦「なんだって！？」
金「亀岩と比べても見劣りしないほどだ。中にはきっと竜宮城に行けるヤツがいるに違いない」
銀「そう思って片っ端から乗りまくっているのだ！」
金「だが今のところハズレばかり。甲羅に乗ろうとしても暴るだけ」
銀「中には少し乗っただけで死んでしまう亀もいる」
金「そうなった場合、もったいないから美味しく頂くという訳さ！」
銀「食ってみたらこれが美味なのだ！」
浦「お前たちまたそんな事をしているのか！？　リンゴならいくらでもやるから、もう亀に手を出すな！」
金「俺達だって生きていくのに必死なのさ」
銀「そうだ。それに亀岩以外の亀など何の価値もない。食うより他にはな」
金「というより、あの味を覚えたら止められないぜ」
銀「しかしたまにはリンゴもいい。その時はちゃんと落とせよ！」
金「そういうことだ。じゃあな！」
そう言い二人はいなくなった。
浦「おい待て！」
浦島の言葉はむなしく響いた。
彼らの亀に対する愛情は皆無。
昔と変わらなかった。
それを悲しむように空からポツリポツリと水滴が。
浦「雨か・・」
木の上の浦島には雨を防ぐものなどない。
幸い雨脚はまだ弱かった。
しかし降り止む気配もない。
浦島は一刻も早い助けを求めるため、海にライトを向けた。
疲れた時は雨の中でも眠った。
熟睡することはなかった。
救いは気温が高いこと。

もし今が冬だとしたら雨に体温を奪われ、生きていることすら厳しい状況になっていたことだろう。
浦島はどんな現実にも耐え、決して諦めないことを改めて己に誓うのだった。

翌朝、浦島はまたしても金作の声で目覚めた。
金「おい浦島！　リンゴを頼む！」
浦「おや？　二日続けてじゃないか！？」
銀「昨日は亀が現れなかったんだ！　おそらく雨の影響だろう」
浦「ほう」
昨日からの雨はまだ降り続いていた。
浦「空模様を見ているのだが、どうやら嵐がきそうな予感だ！」
金「本当か！？」
浦「近いうちに大きいのが来るぞ！　しんかい２０００の時のような。お前達は大丈夫なのか！？」
金「ハハハ！　こんなこともあろうかと小屋を作ったんだ」
銀「小さいが木製で頑丈なやつだ！　嵐など問題なしさ！」
金「それよりお前はどうなんだ！？　自分の心配をしたほうがいいぞ！　ハハハ」
浦「そうか・・」
金「助かりたかったら、嵐が来る前に救助を呼ぶことだ！」
銀「頑張れよ！」
浦「それより亀にはあまり手を出さないと約束してくれ！」
金「おいおい。何度も言うが亀の心配よりも自分の心配を！」
浦「答えてくれ！」
金「分かった。約束するよ！」
浦「本当か！？」
金「ただし俺たちが竜宮城に着いて、乙姫とやらに会い、この姿を元に戻してもらったらの話だが」

銀「そうだ。それまで亀狩りは続けるぜ！」
浦「待て！　これ以上亀を殺すな！」
金「行こうぜ銀作」
銀「おう」
二人は浦島の言葉にはまったく耳を貸さなかった。
浦島は大きく息をついた。
浦「なんとかしなければ・・　だが私に何ができるというのだ・・」
悩んだ。
しかし彼らの言う通り、今は嵐に備えることが先決と考えた。
浦島は近くの枝を数本折り、雨よけにと考えた。
強風で飛ばされないように、ロープと体を改めてしっかりと結び直した。
浦「よし。これで大丈夫」
不安はあるが、できることはした。
浦島の予想通り、雨は次第に激しさを増していった。
そして、その数時間後には強い横風が吹き始めた。
海も荒れ始める。
黒い雲が上空に迫ってきた。
まもなく激しい暴風雨が島を直撃した。
激しい雨が豪音と共に鳴り響く。
浦島の体を打ち付ける。
浦島のいる大木も左右に大きくうねった。
浦「これは予想以上だ！」
必至に耐えた。
油断をすると体が飛ばされてしまいそうだった。
ひたすら木にしがみついていた。
雨は一向に弱まる気配がない。
しばらくして身の危険を感じた浦島は、再び救助の船を探そうと、
嵐の中にもかかわらず懸命に立ち上がり、海にライトを向けた。
浦「まだ昼だというのに真っ暗だ・・　くそっ、ダメだ！　立って

いられない！」
諦め再び身を屈めようとした瞬間。
強風によってどこからか飛んできたヤシの実が頭を直撃！
そのまま意識を失い、その場に倒れた・・

一方そのころ金作と銀作は・・
自分たちで作った木造小屋に避難していた。
銀「すごい嵐になったな」
金「なあに。この小屋があれば心配ないさ」
銀「そうだな。思ったよりも頑丈そうだ」
金「それに森の中だから、周りの木々が雨や風を多少和らいでくれている」
銀「これを作って正解だったな。狭いのは我慢するとして、嵐が過ぎるまでゆっくりリンゴでも食っていようぜ」
金「そうしよう。しかし浦島は今頃どうしてるかな？」
銀「さあな。ハハハ」
余裕の笑みを浮かべていた二人だったが。
グガガガガガガ。
島に突然の異変。
銀「な、何だ今の！？」
激しい横揺れであった。
金「地震か！？」
銀「見てみようぜ！？」
金作は慌てて立ち上がると、確認のため小屋のドアを開けた。
そこで彼らが見たものは・・
金・銀「うわあああああああああああ！！」

どれくらいの時間が経ったか・・

浦島はようやく意識を通り戻した。
浦「はっ！？　しまった。気を失っていたのか。頭が痛い・・」
未だ激しい豪雨の中にいた。
浦「一層嵐が激しくなったようだ・・　すさまじい勢いだ」
自分の声すらまともに聞えぬほどの轟音であった。
だがひとつ異変を感じた。
浦「いや待て・・　これは雨の音ではない・・」
自分の耳を疑った。
浦「波の音だ！」
この島に来てから、常に遠くで聞えていた波の音が、今は極端に近く感じる。
これは幻聴ではないと確信した浦島は、危険をかえりみず木から下を見下ろし愕然とした。
浦「な、なんだこれは！！」
なんと、荒れ狂う波が浦島のすぐ下まで迫っていたのだ！
浦島のいる大木が・・
いや、この島が丸ごと今まさに海に飲み込まれようとしていた！
浦「悪い夢でも見ているのか！？　まさかそんなことが！」
高所にいたことが幸いして、浦島はかろうじて生き延びていたのだ。
しかし波はみるみる迫ってくる。
水しぶきが容赦なく降りかかる。
浦「いったいどうすれば！」
冷静さを欠くのも無理はなかった。
浦「おーい！　誰か助けてくれー！」
とりあえず叫んだ。
しかし老体から発せられるかぼそい声は、雨の轟音によっていともたやすくかき消されてしまう。
浦「誰かー！！　助けてくれー！！」
それでも諦めずに叫び続けた。
海水が降りかかる。

強風に飛ばされそうになる。
それでも木にしがみつき、必死に叫んだ。
体力は限界を越えていた。
浦「もうダメかもしれない・・」
ついに声を出すことが出来なくなった。
死を覚悟した。
だがその時。
遥か遠くにだが、わずかな光が見えた。
満足に目を開けていられない状況ではあったが、確かにそれは見えた。
浦「光？」
薄れる意識の中、それは希望の光のように見えた。
浦「もしかしたら人かもしれない」
浦島の手は無意識に背負っていたバッグに伸び、サーチライトを取りだした。
そして希望の光に向けてスイッチを入れた。
幸い嵐の中でもライトは強力な光を発した。
浦「頼む！　気付いてくれ！」
祈る気持ちでライトを握りしめた。
そして数分後、奇跡が起こった。
空に今度は別な光が見え、ゆらゆら揺れながら近づいてくる。
それは救助のヘリだった。
救助隊「誰かいるのかー！！」
その声はかすかに浦島の耳に届いたが、返答を返す力は残っていなかった。
浦「上空を飛んでいるのは何だ？　人なのか？」
浦島はライトの光を上空に向けた。
救助隊員はその光を頼りにロープをおろし、ゆっくり浦島の元へ向かう。
隊員から見れば、浦島は海で溺れている人にしか見えないはずであ

る。
そこが木の頂上で、下には島があるとは想像もつかないであろう。
それどころか、人間がいるのかすら確認しずらい状況。
どんなに波にさらわれそうになっても、浦島はサーチライトを持つ手を離さなかった。
隊員も人がいることを信じ降下してきた。
隊「間違いない！　人だ！」
ついに隊員の手が伸びた。
隊「大丈夫かー！！　手を伸ばすんだ！！」
その言葉は浦島の耳に届き、力いっぱい手を伸ばした。
隊員はその手をしっかり掴んだ。
あとは引き上げるだけ。
ところが浦島の体が上がってこない。
原因は浦島の体を繋ぎとめていたロープであった。
隊員はそれを見逃さなかった。
隊「おい！　このナイフでロープを切れ！！」
そう言ってナイフを差し出した。
浦島は、ついにここまで世話になったライトを手放し、ナイフを受け取ると、最後の力でロープを断ち切った。
サーチライトは光を放ち続けながら木の上に落ちた。
隊員は力いっぱい浦島を引き上げた。
強風により二人の体は大きく揺れ、困難な救助となった。
ようやく浦島の体が隊員の体に固定されると、ワイヤーを引き上げるようヘリに指示を出した。
そして、無事ヘリに辿り着いた。
それを確認すると、浦島を乗せたヘリはゆっくり旋回し飛び立った。
浦島は間一髪のところで命を取り留めたのであった。

## 第5話　絶体絶命（後書き）

次話→9／26（日）

## 第6話　ニュースが伝えたもの

それから数日が過ぎた。
浦島が目を覚ますと、そこは銅次郎のねぐらであった。
浦「なぜ私はここに」
銅「気が付いたか？」
浦「銅次郎さん」
銅「心配したぞ」
浦「私は無事だったのか」
銅「テレビのニュースを聞いて、浦島さん達のことはあらかた予測していたが」
浦「ニュース？　なんですかそれ？」
銅「この時代の必需品です」
浦「そうですか」
銅「街の電気店で偶然見かけた。おそらくお前さんを乗せたであろう船が遭難したというニュースを。胸騒ぎがしたから連日テレビを見に出かけた。そしてようやく一人の男性が救助されたというニュースを聞いた。報道では身元が分からなかったが、すぐ浦島さんと分かった。病院に駆けつけ確認を取った。ひとまず無事ということだったから、その場で引き渡してもらったのだ」
浦「そうでしたか」
銅「ところで他の二人だが・・」
浦「金作と銀作ですか？」
銅「そう」
浦「彼らはおそらく・・」
浦島は黙ってうつむいた。
その様子に銅次郎も察しがついた。
銅「気の毒だが、今回の事故では無理もない・・」
浦「はい・・　私が生き残れたのは本当に奇跡です」

銅「まったく。しかしなぜあんな無茶を？」
浦「それは・・」
浦島はいきさつを話した。
銅「そうか・・　それで竜宮城はまだ見つかっていないのだな？」
浦「はい。わたしも乙姫様の真意を確かめたい一心で竜宮城を探しました」
銅「気持ちは分かる。だが焦る必要はないだろう」
浦「はい。今回でそれが困難だと分かりました」
銅「諦めることはないが無理はせんようにな」
浦「心配かけてしまいました。ところで、気になっていたのですが電気店というものを詳しく教えて頂けますか？」
銅「ああそれなら、山を出て数キロ行った所にある街。そこに電気店がある。私も街は詳しくはないが、テレビはとても便利だから出かけた際は立ち寄ることが多いのだ。お前さんも興味があったら行ってみるとよいだろう」
浦「はい」
銅「電気の力はこの時代に不可欠なもの。遭難しているお前さんを発見したのも、灯台の明かりだったと聞く」
浦「あの光が・・　では私が持っていたサーチライトも電気の力・・」
銅「そういうこと。どれも素晴らしいものばかり」
浦「電気の力で竜宮城を見つけることはできるでしょうか？」
銅「ハハハ。それはどうかな～」
二人は笑顔を見せた。
浦島はわずかな希望を感じた。
銅「しかし浦島よ。改めて言っておくが、お前はこの時代の人間ではないのだ。もしお前が浦島太郎と世間に知られたら大変なことになる。それだけは肝に銘じて行動するようにな」
浦「はい。分かっています」
銅「うむ」

銅次郎は安心した様子。
銅「さて飯にしようか。腹が減っただろう」
浦「ありがとうございます」
浦島も手伝おうと体を起こし立ち上がった。
銅「まだ寝ていてよいのだぞ」
浦「もう大丈夫です」
銅「それはなによりだ。ハハハ」
二人で浦島の生還を祝った。

翌朝。
浦島は気持ちを新たに、淋代海岸で海を眺めていた。
浦「ここは私にとって、とても思い出深い場所。１６００年前に亀を助け竜宮城に旅立った。そして１６００年が経ち。改めてここから竜宮城を目指した。見つけることはできなかったが・・・　次はどんな旅立ちが私を待っているのだろうか・・」
ぼんやりとそんなことを考えていた。
嵐の時とは打って変わって、とても穏やかな海であった。
浦「どうすれば竜宮城に行くことができるか・・・　金作と銀作はいなくなってしまった。これからは全て自分でやらねば」
嫌な二人だったが、今思うと頼もしいパートナーであった。
改めて気を引き締めた。
そしてもう一つ気になっていたものがあった。
あの無人島である。
もうあの島はなくなってしまったのか。
不思議な島だった。
そこで自然とある決心する。
浦「もう一度あの島を探してみよう。望みは薄いが、見つかれば金作達を探せる」
浦島は海岸を後にし、街へ出発した。

やや長い道のりだったが、ようやく着いた。
そこは人で溢れていた。
浦「これが銅じいさんの言っていた街・・」
浦島だけは、年齢といい服装といい明らかに周りの人と比べ浮いていた。
すれ違う人々は好奇の目で浦島を見る。
浦「銅じいさんに言われた通り、自分の存在は伏せるようにしよう」
そう心がけた。
浦「しかしこの時代の人に私の日本語が通じるのだろうか」
それすら疑問に思えた。
さっそく近くにいた人に話を。
浦「失礼ですが・・　私をご存じですか？」
突然の意味不明な質問に通行人も首を傾げたが。
人「そうだ！　あなたしんかい２０００で救助された！？」
浦「はい、そうです！」
人「驚いたな～　無事でよかったですね」
浦「はい」
人「ニュース見て驚きましたよ！」
浦「本当ですか？　それで私が救助された場所はどの辺りだか分かりますか？」
人「場所・・　ああ・・　あれは確か、○○岬あたりだったと思います」
浦「ありがとうございます」
浦島はさっそくその○○岬を訪れた。
様々な人に聞きこみをして、ようやく○○岬に辿り着くと、運よくDという人物に接触できた。
D「ええ。私が海にいたあなたを発見し、救助しました」
浦「本当ですか！？」
D「はい。あの時は本当に驚きました。ご無事でなによりです」
浦「お世話になりました」

D「いえいえ」
浦「ところで私が救助された時、私の足元に木・・　いや島があったことはご存じですか？」
D「いいえ。それは初耳ですね」
浦「ではこの近辺に小島は・・　無人島などはありますか？」
D「それならばいくつかはあると思います。しかしあなたを救出した場所は、位置的に島などはなかったはず」
浦「それは確かですか？」
D「ええ」
どういうことだろう・・
疑問が浮かんだ。
確かにあの無人島がこの近くの島だとしたら、もっと早くに救助を求められたはずである。
しかし無人島で見張りをしていた時、近くに島や陸などは見えなかった。
では嵐の日に何かが起きたのか？
ヤシの実で頭を打ち、気を失っている間に何かが起きたのかもしれない・・
考えるほど頭は混乱した。
結局その日は帰ることにした。

銅次郎のねぐらに着いたのは暗くなってからだった。
銅「今日はどこへ？」
浦「私が遭難していた時にしばらく暮らしていた島があったのですが、そのことを詳しく知りたくて色々な人を尋ね歩いていました」
銅「そうか」
浦「自分の中ではケジメを付けたつもりでも、まだどこかで諦めきれないのかもしれません。金作や銀作・・　それにしんかい２００の人達のことが・・」

銅「その気持ちは分かる。辛い気持もな。どうだろう？　私が言ったテレビ。きっと様々は情報が手に入るだろう」
浦「そうでしたね」
銅「しんかい２０００の海難事故は今でもニュースになっているだろう。何か分かるかもしれん」
浦「はい。明日電気店に行ってみます」
銅「うむ」

翌日。
さっそく浦島は街の電気店に向かった。
店頭に展示されているテレビを初めて見た。
浦「これがテレビ・・」
近くの店員に話を聞いた。
浦「申し訳ないがニュースというものを見せてもらいたいのです」
店員「店内に大型テレビがありますのでご案内いたします」
店員に案内され店の中へ・・・
大型テレビの前に来ると、店員がチャンネルを変えた。
さっそくニュースが放送されていた。
そしてまさに今しんかい２０００の話題が始まった。
浦「これだ」
ニュースキャスターが話す。
キャ「先日消息不明となったしんかい２０００の捜査が今も続いています。乗組員は５名。先日救助された一人を除き、残り四人の安否は確認されておりません」
店員「大変な事故ですね～　おそらく船も見つからないでしょう。助かった人がいると聞いた時は驚きました～」
浦「実は・・・　私です」
静かに言った。
店員「本当ですか？」

浦「はい」
店員「それは驚きました！」
浦「他の仲間のことが心配で・・　あいにく私は山で暮らしていて、情報を入手する手段がない。よければこのテレビを使わせて頂きたいのです」
店員「そういうことでしたら構いませんよ。いつでもどうぞ」
快く承諾してくれた。
そして浦島のためにソファーを持ってきてくれた。
員「お掛けになってください」
浦「ありがとうございます」
ソファーに腰掛け、真剣な面持ちでテレビを見つめる。
ニュースはしばらく続いたが、船の発見は難しいだろうというのが専門家の判断だった。
キャ「ということで、しんかい２０００海難事故のニュースは今後も速報が入り次第お伝えしていきます」
そして次のニュースへ。
浦島は大きく息を吐いた。
やはり発見は困難。
しんかい２０００のみんなは・・
ニュースの内容は絶望的なものであった。

翌日も、また次の日も、浦島の姿は電気店のテレビの前にあった。
次第に店の従業員の間でも浦島の話題が絶えなくなっていた。
しかし彼が童話の浦島太郎本人という事実を知る者はいなかった。
その日もニュースが始まる。
浦島の期待をよそにこれといった進展はなかった。
そして、ある重大発表が。
キャ「ここで発表がありました。本日をもって、しんかい２０００の捜索は打ち切りになりました」

それを聞いた浦島は愕然とした。
浦「なに！？　どういうことだ！？」
店員「どうかされました？」
時々あの店員も浦島の様子を見に来てくれた。
店員「捜索打ち切りですか・・　辛いでしょうが、仕方ないですね」
肩を落とした浦島。
もう打つ手はない。全て終わりか・・
そう思った。
そして静かに言った。
浦「店員さん。お世話になりました・・　もう来ることはないと思います・・」
店員「そうですか。我々としてもお役に立てたのなら幸いです。どうかあなたは元気を出してください。無事生還したのですから、お体を大切に」
浦「ありがとう」
浦島は礼を言ったが、顔に笑みはなかった。
ソファーからゆっくり立ちあがると、店の出口に向かって歩き始めた。
しかしその時。
ふとテレビから流れた、あるニュースの話題にその足がピタッと止まった。
キャ「さて続きまして海外からとてもミステリアスなニュースが入ってきました！」
浦「！？」
店員「おや？　なんでしょうね・・」
店員も興味を示した。
浦島は再びテレビの前に戻ってくると、画面に釘付けとなった。

## 第６話　ニュースが伝えたもの（後書き）

次話→９／３０（木）

## 第7話　遠く離れた島に

ニュースキャスターが次のニュースを伝える。
キャ「さて。みなさんご存じのハリウッドスター、ＬＤプリオさんが所有する島。先日そこでとても奇妙な出来事が起きたという報告が入りました。現地から伝えてもらいましょう。リポーターの守屋さん！」
画面は現地に切り替わった。
守「はい！　守屋です。私は今、あのＬＤプリオさんの別荘のある島に来ています。今回は特別な許可を得て取材することができました。ここで先日とても不思議なことが起きたということで、島の管理人でＬＤプリオさんの付き人でもあるトムさんにお越し頂きました。さっそく話を聞いてみたいと思います！」
トム「トムです。どうぞよろしく」
守「よろしくお願いします。さっそく今回起きたことを話して頂けますか？」
トム「ＯＫ。先日のことです」
守「はい」
トム「私は仕事の一環でＬＤプリオがこの別荘に来る直前に島を見回るのですが、そこで思わず目を疑う光景を目撃したのです」
守「それは！？」
トム「あれが見えますか？」
トムが島の遠方を指さす。
守「はい。山が見えますね」
トム「そう。あの山・・　実は先週まではありませんでした」
守「なかったと言いますと！？」
トム「もともとこの島は、あの山の手前までしかない小さな島なのです。しかしあの隆起した山が現れ、実質、島の大きさが以前の倍以上になりました。わずか１週間ほどの間にです」

守「本当ですか！？」
トム「ええ」
テレビに見入る店員と浦島も目を丸くした。
そして浦島は、そこにあるものを見た！
浦「あれは・・　まさか・・」
テレビの中では二人のやり取りが続く。
守「いったいどういうことなのですか？」
トム「詳しいことは私にも分かりません」
守「地震や火山活動によって新たな陸地が現れたということでしょうか？」
トム「それはないでしょう。この短期間ですから」
守「ではこの一週間に何が・・」
トム「考えられるとしたら、別の島が急接近して、この島と結合した・・」
守「別の島！？」
トム「細かいことは専門家に調査を依頼しています」
守「不思議ですね」
トム「それが、まだ驚くのはまだ早いのです」
守「！？」
トム「あの山の密林の中に、一本だけとりわけ大きな木が分かるでしょうか？」
テレビに映し出された光景に浦島は驚愕した。
浦「あっ！　あれは！　間違いない・・　あの木」
店員「え？　何ですって？」
浦島の異変に気付いた店員も戸惑いをみせた。
緊迫したトムと守屋のやりとりが続く。
守「はい見えます！　なんでしょうあの木は？」
トム「不思議な木でしょう？」
守「まるでジャックと豆の木のようですね」
トム「そう。そして私が昨晩あの島を眺めていた時です。島の高い

所で何かが光っていたのです。気になりよく見ると、どうやらあの木のてっぺんから発せられているようでした。まるで灯台の明かりのように」
守「ほう」
トム「光は空に向かって伸びていました。光の正体を突きとめようと、私はすぐに連絡を入れ、ＬＤプリオの専用ヘリで木を調べてもらいました」
守「いったい何が？」
トム「すると木の上からこんなものが見つかったのです」
足元のカバンからある物を取り出した。
それは小型のサーチライト。
守「そのライトが！？」
トム「はい。よく見るとここに文字が見えます」
守屋にライトを差し出し見せるトム。
守「これは・・　しんかい２０００と書いてあります」
トム「はい。つまり日本製ということです。同時に日本人がこの島に侵入した可能性も出てきました」
守「これは少し前に消息を絶った日本の船ですね」
トム「そうなのです。私もその話を聞いた時は驚きました。まさかその船の船員がこの島に？　とてもそうは考えられない」
守「謎ですね。トムさんありがとうございました」
守屋はカメラに向かい。
守「どうやらこの件は日本のしんかい２０００が強く関係している可能性が高そうです。ということもあり、我々が優先的に取材を許可された訳ですが、ここで一度スタジオにお返します！」
ニュースはそのあとも続いた。
浦島は何かに化かされている気分だった。
しかし目の前の出来事は全て現実。
浦「やっぱりそうだ。あのサーチライト・・」
しばらく放心状態の浦島。

店員「あの・・　大丈夫ですか？」
店員が気遣う。
すると突然浦島がソファーから立ち上がり店員の肩をゆする。
浦「お願いだ。あそこに連れて行ってくれ！　今すぐ！」
店員「ど、どうしたのですか！？」
浦「あれは私がいた島です！」
店員「ちょっと待って下さい。ＬＤプリオの島は、確かハワイ島の近く。ここからは５０００キロ以上離れた場所です！　そんなところにあなたがいたなんて？　まさか～　ハハハ」
冗談と店員も笑うが。
浦「嘘ではありません！　その証拠に、あのライトも私が使っていたものです！」
店員「本当ですか？」
言われてみればライトには、しんかい２０００という文字が書かれていた。
そして、この浦島が救助された時に乗っていたのがしんかい２０００となると・・
あながちデタラメとも思えない。
浦「だから早く私をあの島に！！」
店員「わ、分かりましたから落ち着いて！」
興奮がおさまらない浦島を必至に抑える店員。
店内の騒ぎが静まったのは、数時間後であった・・

銅次郎のねぐらに戻り浦島はテレビで見たことを話した。
銅「そうか・・　不思議な話だ」
浦「はい。私はその島に行ってみようと思います。あのテレビが映している物が真実だとしたら、この目で確かめたい。幸いその島まで案内してくれる人も見つかったので」
銅「いつ行くのだ？」

浦「今晩出発する予定です」
銅「気をつけてな」
浦「はい。ただ・・　テレビ局に私の存在を知られてしまったら・・」
銅「こうなってしまったら仕方あるまい・・　だがまだ誰もお前さんが浦島太郎と知っているわけではないのだから、そこは伏せるように心掛けるのだ」
浦「はい」
銅「無事を祈っているぞ」
浦「行ってきます」

その晩。
浦島は再び電気店に足を運んだ。
そこでテレビ局のスタッフ数名と合流した。
浦島は下の名前は偽名を使った。
初体験となる飛行機に乗り目的地へ向かった。
ＬＤプリオの島に到着したのは翌朝であった。

「ようこそ！」
アメリカの報道陣が待ち受けていた。
テレビで見たトムも姿を見せた。
トム「よくいらっしゃいました」
浦「こんにちは。浦島です」
トムと握手をした。
皆、浦島たち日本人を歓迎してくれた。
テレビで見たまったくの同一人物を目の前に。
浦「トムさん。あなたのことはテレビで見ていました」
トム「そうですか。しかし驚きました。海難事故で救助された方が、こんなにお歳を召された方とは」
浦「よろしく」

まさか１６００歳ですと言えるはずもない。
浦島は笑顔で返した。
トム「こんなお年の方がこの島に侵入できるとは思えません」
浦「この島は初めてです」
トム「ではこのサーチライトは確かにあなたのものですか？」
トムはライトを浦島に手渡した。
それは紛れもない。
浦「はい。私のものに間違いありません」
トム「Ｏｕ。ますますミステリーですね。ハハハ」
誰もが首を傾げた。
あるものは浦島に疑いの目を向け、あるものはお手上げといった表情であった。
浦「さっそくですが、新しく発見された島を案内して頂けますか？」
トム「ＯＫ～　では行きましょう」
トムと浦島、そして日米の報道関係スタッフ含め、計１０人ほどで新しい島を回ることになった。
島の周辺を歩くと、浦島が上陸していた時の島とは大分違う印象であった。
浦「この島・・　随分と大きかったのだな」
しかし数々の証拠から、ここが浦島のいた島に間違いないはずである。
島にいくつか気になる発見があった。
それはところどころに見られる洞窟のような横穴だ。
高さは４ｍほど。
浦「この大穴は何なのでしょう？」
トム「詳しくは分かりませんが注意して下さい。時々急激な水が流れてきます。おそらく海と直結しているのでしょう」
中でも一カ所特大サイズ、高さ８ｍはあろうかという大穴があった。
あまりにも深いため、奥はまったく見えない。
浦「この穴は大きいですね！」

トム「気をつけてください。ここは大変危険です！」
浦「どうして？」
トム「この穴からは時々激しい熱風が吹きだしてきます」
浦「熱風？」
トム「ええ。火山ガスかもしれません」
浦「洞窟の中へは入ったのですか？」
トム「いいえ。危険なので、これも後日調査団に依頼しています」
浦「そうですか」
トム「ですので絶対に近づかないように」
浦「分かりました」
なんの穴だろう・・
浦島は気になって仕方なかった。
島の外周を終え、ついに本土の探索が始まった。
足場の悪い地面の連続は浦島の体にはキツかった。
そんな時は、トムやスタッフの力を借りた。
陸に立ち改めて実感する。
浦「やっぱりこの島だ」
浦島はついに探していた無人島に再び降り立ったのだ。

トム「おや？　これはなんでしょう？」
砂に埋まっていた何かをトムが引きぬいた。
トム「どうやら食べ物のカスですね。漂着ゴミでしょうか」
浦「見せてください」
それを見た浦島は。
浦「やっぱりそうだ。あの時食べた非常食・・」
彼らは島の中心部へと足を進めた。
浦「あれは！？」
浦島が見つけたのは木の切り株。
トム「誰かが木を切った跡。おそらく人間の手によるもの」
浦島は思った。

浦「おそらく金作と銀作だろう・・　この近辺に小屋を作ったと言っていた」
辺りを見回すが、当然ながら彼らの姿はなかった・・
浦島は悲しい気持ちになった。
トム「大丈夫ですか？　ミスター浦島」
浦「ええ」
トム「では大木に向かいましょう」
島の中央の大木に着いたのは、探索を始めてからおよそ5時間後であった。
皆、その木を見上げ思わず声をもらした。
「これは凄い・・　なんと神々しい・・」
浦島は全員の前ではっきり断言した。
浦「これは私が救出された時に登っていた木です。私はこの木の頂上で数日間暮らしていました」
トム「そこであなたのサーチライトが見つかっていますから、疑いようがありませんね」
そこで日本人スタッフが。
スタ「しかし木の上では、食事はどうしたのですか？」
浦「この木の上にはリンゴが実っています。それもとびきり大きいのが大量に」
スタ「本当ですか？」
浦島の話に興味を持ったスタッフの一人が、実際に木に登ってみることにした。
若いスタッフはスイスイと登り、まもなくてっぺんに着いた。
スタッフの声が聞こえてきた。
スタ「本当にリンゴが生っています！」
いくつか下に落とした。
それを手にしたトムは。
トム「驚いた。こんなリンゴを見るのは初めてだ！　うん。味も格別だ」

浦「私はそのリンゴのみで暮らしていました」
トム「あなたがこの島にいたことは間違いないでしょう。ただ疑問なのは、なぜその島がここにあるのかということ」
浦「それは分かりません」
トム「ううん・・　ミスター浦島も疲れたことでしょう。どうですか？　その話はゆっくり別荘の中でしては」
浦「構いません」
それを聞いた日本人スタッフは。
スタ「別荘！？　別荘ってＬＤプリオの？　我々も招待してくださるのですか！？」
トム「もちろんですよ。ハハハ」
スタ「信じられない。来てよかった～」
スタッフは興奮がおさまらない様子。
一方ハリウッドスターなどまるで知らない浦島にとっては関係のないことであった。

## 第7話　遠く離れた島に（後書き）

次話→１０／３（日）

# 第8話　再会

浦島一行は豪華なＬＤプリオの別荘に招かれ、これまた豪勢な食事がふるまわれた。
トム「お味はどうですか？　ミスター浦島」
浦「とても美味しい」
トム「それはよかった」
浦「まるでこの世の物とは思えない美味しさ・・　そう。竜宮城にいるようです」
トム「竜宮城？」
浦「いえ・・　何でもありません・・」
あまりの感激ぶりにうっかり口を滑らせた。
その言葉に日本人スタッフは敏感に反応し、互いの顔を見合わせた。
「今、竜宮城って言いましたよね・・」
「ええ聞きました」
「それに名前が浦島っていうのも・・」
「まさかとは思うけど・・」
「そんなはずないでしょ～」
そんなやり取りが聞こえたような・・
浦「今のはまずかったか」
浦島は反省した。

夜になると、浦島は来客用の寝室に通された。
トム「今晩はここでお休みください」
浦・スタ「なんて素晴らしいんだ」
ベッドに腰を下ろすと、一日の疲れが溢れてきた。
横になり目を閉じる・・
浦「ふー疲れた・・　たっぷり寝よう」
そう思って横になったものの、なぜか眠れない。

ベッドというものに慣れていないためか？
体は疲れているが、頭は冴えているようだ。
しばらくボーとしていたが、寝るのを諦めた。
浦島は起き上がると部屋から出た。
廊下でトムと出くわした。
トム「どうしましたか？」
浦「ちょっと眠れないので、夜風にあたりたいのです」
今は通訳のスタッフがいないので、ジェスチャーで伝えた。
トム「ＯＫ。どうぞ」
トムに案内され外へ。
風が気持ちいい。
月も綺麗だ。
月明かりで辺りの様子もよく見える。
トム「気をつけてくださいね」
浦「ありがとう」
何も考えず、しばらくブラブラと歩いていた。
大きく深呼吸をすると体が少し軽くなった。
浦「そうだ。あの島を見に行ってみよう」
突然思い立った。
夜だというのに。
それもたった一人で・・
危険であるのは分かっていたが、気になったのである。
眠れないのはそのせいかもしれない。
浦島は歩を進めた。
やがて辿り着いたのは、昼に来た一番大きな洞窟。
浦「ここはトムさんが危険と言っていた場所・・」
トムの言葉を思い出した。
浦「中の様子を見られないだろうか」
浦島は好奇心を抑えきれず、ゆっくり洞窟内に足を進めた。
その時だ。

中から強烈な熱風が吹き付け、浦島の体を数メートル後ろに吹き飛ばした。
ドスッ。
浦「いてて。なるほど、トムさんの言った通りだ」
浦島は立ち上がった。
浦「いったい中には何が・・」
危険と分かってはいるものの、なぜか引き返そうとはしない。
洞窟の中を凝視する。
しかし、昼間でさえ見えなかったのに、夜はなおさらである。
浦「サーチライト持ってくればよかった・・」
そんな事を考えていた時だ。
「うらしまさん」
声がした。
浦「え？」
洞窟内からだ。
まさかとは思ったが。
「やっと会えましたね」
確かにそう聞こえた。
次の瞬間。
中からドデカイ首が現れた。
浦島の目の前に現れたもの、それは亀の首だった！
浦「うわあああああ！」
浦島は驚きのあまり尻もちをついた。
「１６００年ぶりですね。私が分かりますか？」
浦「その声は・・　まさか・・　亀岩さん！？」
亀「そうです」
浦「し、信じられない！　夢を見ているようだ！」
亀「夢ではありません。この前もお会いましたよ」
浦「嵐の日にですね。まさか私を助けてくれたのが、あなただったなんて！」

亀「ご無事でなによりでした」
浦「初めて会った時から１６００年以上経ったのに、まだ生きておられたとは」
亀「もちろんです。浦島さんが目覚める日を静かに待っていました」
浦「私のことは知っていたのですか？」
亀「はっきりとではありませんが、浦島さんが目覚めた時、何かを感じました。そして危険が迫っていた時も・・」
浦「助けてくれてありがとう。やはりあなたは特別な亀なのですね」
亀「もちろんです。乙姫様にお仕えしていましたから」
浦「そうだ。乙姫様はどうしていますか？」
亀「乙姫様ですか」
浦「できるならもう一度竜宮城に行って、乙姫様にお会いしたいのです。私を連れて行ってくれませんか？」
亀「残念ながら今の私には無理です。ご覧の通り、体がこんなにも巨大に・・　これでは竜宮城に行くことはできません」
浦「そうですか。他の手立てはないものでしょうか？」
亀「それならば私の子供たちに頼めばよいでしょう」
浦「子供！？」
亀「はい。まだ生後間もないですが心配いりません」
浦「なるほど」
亀「私がこの島に来たのも、ここを産卵地に決めたからです。ようやく産卵が終わり、子供たちも孵化し海に旅立ちました。私もやるべきことが終わったので、間もなくここを離れるつもりです」
浦「そうだったのですね。しかし知っていますか？　今人間達の間で、あなたのこと。この島のことが話題になっています」
亀「それは私としても大きな誤算でした。おかげでここを動きづらくなってしまいました。しかしいつまでもここにいる訳にもいきません」
浦「任せてください。この時代の人達には、私から上手く言って、なんとか誤魔化してみせます。それより私は亀岩さんに会う事がで

きて本当によかった」
亀「私もです。浦島さん」
再会の喜びに浸っていた。
そんな時。
遠くで声がした。
「ミスター浦島～！」
声を聞きすぐに分かった。
浦「トムさんだ！　私を探しているみたいだ」
亀「え？」
浦「さっき私が大声を上げたから、それを聞いて心配したのかも・・・」
どうやらトム以外にも数人いるようだ。
「ミスター浦島～！」
「浦島さん～！　どこですか～！？」
「ちょっと！　浦島さんがどうかしましたか？」
「少し前に外出したらしいのですが、悲鳴を聞いたと、トムさんが・・」
「なんだって！？　それは大変だ！　浦島さ～ん！」
「もしかしてあの島に行ったのでは？」
「こんな時間に？」
「行ってみましょう！」
「浦島さ～ん！」
彼らの声がどんどん近づいてくる。
亀「やはりあなたを探しているようですね」
浦「こっちにくるみたいです。どうしよう！？　このままだと亀岩さんも」
その時、亀岩が。
亀「浦島さん。今すぐここを出ましょう！」
浦「ええ！？　どういうこと・・」
亀「私と一緒に島から逃げ出しましょう。あなたにとっても島にこ

れ以上いる理由はないでしょう？　ならば早いほうがいい」
しばらく間をおいて。
浦「分かりました」
浦島は頷いた。
一緒に来たスタッフのみんなやトムさんを裏切ることになるとも思ったが、このままでは亀岩さんも見つかってしまう。
これ以上騒ぎを大きくしないために浦島は覚悟を決めた。
亀「浦島さん。私の鼻の上に乗ってください！」
浦「鼻！？」
亀「急いで！」
浦「はい」
言われるがまま亀岩の元に駆け寄る。
亀岩は自分の顔を地面に押し付け、鼻の頭を突き出した。
浦島は、それでも彼の体の倍はあろうかという高さの亀岩の鼻によじ登った。
亀「乗りましたか？　では行きますよ～」
浦「えっ！？」
すると浦島を乗せた状態で首を持ち上げ、勢いよく鼻息を吹いた。
浦「わあああああああああ！！」
その勢いで浦島の体は空高く舞い上がった。
やがて急速に落下してくる。
すると、亀岩中央の大木が突然ゴムのように伸びて、浦島の体を、まるで人の手のような動きで受け止めた。
浦島を乗せた大木は、今度は急速に収縮し元の場所に、元の姿で戻った。
浦「な、なんだ今のは！？」
一瞬のことに何が起きたのかと目を白黒させる。
辺りを見渡すと、そこは見慣れた風景。
大木のてっぺんであった。

「おい！　今悲鳴が聞こえたよな！？」
「浦島さんの声に違いない！」
「やっぱりあの島だ！　急ぐぞ！」
浦島の声はトムやスタッフ達にも届いていた。
彼らが急いで駆け付けようとした時。
突然、地面が突然激しく揺れた。
ドドドドドドド。
「な、なんだこの揺れは！？」
「地震か！？」
揺れは、走ることはおろか立っていることすらままならぬほどであった。
「くそっ。立ち上がれない！」
「何が起きているんだ！」
続いて大波が彼らを襲った。
「今度は津波か！　いったいどうなっているんだ！」
かろうじて誰も流されずに事なきを得た。
数分後、揺れはおさまったが、トムたちが駆けつけそこで見た光景は・・・
ただ静かに広がる一面の砂浜であった。
トム「これはどういうことだ！？」
スタ「島が・・・　消えた？」
誰もが茫然と立ち尽くした。

## 第8話　再会（後書き）

次話（最終話）→１０／６（水）

## 最終話　旅立ち

翌日のニュース。
「ＬＤプリオさんの所有する島に、新たな島が発見されたニュースをこれまでお伝えしてきました。しかし昨晩、今度はその島が一夜にして消えるという。また、島を訪れていた日本人男性一人が、島と共に行方不明になったとのことです。この男性を近くで見てきた人の中には、この人物が日本に古くから伝わる童話の登場人物本人ではないかという、信じがたい議論まで飛び出し波紋が世界に広がっています」
そんなニュースが世界を駆け巡った。

一方浦島は、亀岩の背の大木の上で一夜を明かした。
なぜだろう？
豪華なベッドよりも、ここの方が寝付きがいい。
浦島のそんな疑問をよそに、亀岩は日本を目指し進み続けた。
しんかい２０００とは比べ物にならない速さであった。
朝日を浴び、晴れやかな気持ちで目覚めた。
浦「なんて気持ちいいんだ！」
しばらく心地よい風にあたっていると、突然木が動いた。
またしてもゴムのように木がうねり、浦島を地上へと誘導する。
大地に飛び移ると、木は再びビュンと音をたて元の姿に戻った。
まるで生き物のようだ。
おそらく亀岩の気持ちと連動し、自在に変形させることができるのだろう。
浦島は亀岩の進行方向に頭があると思い、そちらに歩き出した。
多少揺れることもあるが、転倒せぬよう気を配った。
島の先端に到着すると、島がやや浮上し、亀岩の首が海面に現れた。

スピードもやや緩やかになった。
浦「首の上を伝って先端まで来いと言っているのか？」
そう思った浦島は首の上を歩きだした。
首とはいえ、亀岩のものとなると十分な太さがある。
うっかり海に転落する危険もなさそうだ。
先端に来ると亀岩の声がした。
亀「よく来てくれました」
浦「亀岩さん。本当にこの島には色々と驚かされます」
亀「長く生きていると、色々なことができるようになります」
浦「ハハハ」
亀「無事脱出できたようです」
浦「ええ。あっちの島は、今頃どうなっているか」
亀「きっと大騒ぎでしょう」
浦「銅じいさんからもあれだけ言われていたのに。この時代で騒ぎになることは慎めと・・・　これからどうすればいいものか・・」
亀「竜宮城に行かれては？」
浦「私もその気持ちで一杯です。ただひとつ気になっています・・」
亀「それは？」
浦「私が人間だということです。１６００年前にも私は竜宮城に住むことをお願いしたのですが、乙姫様に許してもらえませんでした。理由は私が人間だから。そこは竜宮人の世界。人間の住む場所ではないと・・」
亀「確かにその通りです」
浦「はい」
亀「しかし今なら心配ないでしょう」
浦「本当ですか？」
亀「今の浦島さんは、人間とはいえ、この時代の人々とは違います。私と同様、ここで暮らしていくことは難しいでしょう」
浦「そう思います」
亀「きっと竜宮人も受け入れてくれるでしょう」

浦「そうだとしたら嬉しいです。もし竜宮城にもう一度行くことが許されるのなら、乙姫様に会ってぜひ聞きたい。あの玉手箱について・・」
すると亀岩が乙姫のことを話し出した。
亀「そういえば浦島さんに、まだ乙姫様のことを話していませんでしたね。乙姫様が渡した玉手箱・・　中に入っていた煙・・　全てはただの手違いでした」
浦「手違い？」
亀「はい。あの日、乙姫様はあなたに密かな恋心を抱きました」
浦「私に？」
亀「そうです。そしてあなたと竜宮城で永久に暮らすことを望んだ。しかし浦島さんは人間。人間が竜宮城で暮らすことは掟に反する。そこで乙姫様はあなたを竜宮人にしようと考え、玉手箱の中には竜宮人になれる煙を入れたはずでした。しかし何かの手違いで深い眠りに落ちる煙が・・」
浦「なんですって。いったいなぜ？」
亀「それは分かりませんが、乙姫様とあなたが竜宮城で暮らすことを快く思わなかった竜宮人の仕業かもしれません」
浦島にとって、それは辛い事実であった。
亀「私は乙姫様の指示で、竜宮人になったあなたを数日後に出迎えに行きました。しかしそこで私が目にしたのは、深い眠りについたあなたの姿。すぐに竜宮城に戻りました。乙姫様はショックを隠せないご様子。その時のことは今でも忘れられません」
浦「なんと」
亀「乙姫様は自分を責めました。そして、あなたと暮らすという夢が断たれたことに絶望し、現実に耐えられなくなり・・」
浦「どうなったのですか！？」
亀「あなたと同じ煙で長い眠りにつきました・・」
浦「そんな・・」
亀「乙姫様は眠りにつく直前に、浦島さんが目覚めるその日まで、

しっかり見張り、誰にも見つかることのないようにとだけ言い残しました。そして、その役目を担ったのが銅の家系」
浦「では乙姫様は今も？」
亀「はい。深い眠りの中で、再びあなたが竜宮城を訪れるその日を待ち続けています」
浦「私のために乙姫様までもが・・」
亀「自分を責めることはありませんよ」
浦島の気持ちは複雑であった。
もし玉手箱の中に、竜宮人になれる煙が入っていたならば、浦島はあの時、竜宮城に戻り乙姫様と幸せに暮らすことができたはずである。
それが叶わなかったのは不運であった。
しかし辛いことばかりではない。
浦「私は嬉しいです。乙姫様が私のことなどをそのように想っていてくださったなんて」
乙姫様の愛を感じ、目からは涙がこぼれた。
しばらくの間をおいて。
亀「私もつくづく感じます。人間は金作や銀作のような悪人ばかりではない。浦島さんのような優しい方もいる。乙姫様はそれを見抜いておられた」
浦「そういえば金作と銀作は・・」
亀「あの二人は大量に亀を殺しました。私の背の上にいることも露知らず・・　当然の報いを受けたまでです・・」
浦「そうでしたか・・　申し訳ない」
亀「浦島さんが誤ることはありません」
金作達を思うと、また辛さがこみ上げたが、涙をぬぐった。
亀「少し急ぎましょうか」
浦「はい」
亀「淋代海岸に着いたら、浦島さんとはお別れになると思います。後日私の子供たちが迎えに参ることでしょう」

浦「寂しいですが、あなたには色々と感謝しています」
亀「私もです。あなたは乙姫様にとっても大切なお方。よくここまで頑張ってくださいました」
浦「いいえ」
亀「ではスピードを上げますよ。大木に戻ってください」
浦「分かりました。亀岩さん本当にありがとう」
亀岩はかすかに笑みを浮かべると、首を海中に沈めた。
浦島は島の大木に戻った。
すると島全体が激しい轟音と水しぶきをあげ、猛スピードで海を突き進む。
浦「うっひゃあああああ！」
これまでとは別次元の爽快感に浸る浦島であった。

一方日本では。
銅「これは・・　まずいことになったな・・」
電気店のテレビを見ていた銅次郎がつぶやいた。
浦島が日本を飛び立ってからというもの、連日電気店に足を運んでいた。
この近辺は浦島本人が以前から目撃されているということもあり、見渡すとあちらこちらに記者の姿が目につく。
さっそく一人の男に。
男「ちょっとよろしいですか？　この人見ませんでしたか？」
と、浦島の写真を見せられた。
銅「さあ・・　分かりませんね」
男「見かけたことは？」
銅「見たことはあるかもしれない。随分騒ぎになっているみたいだからね」
男「そうなんです。実はこの人物、あの浦島太郎ではないかという噂がありまして」

銅「それにしても、これではまるで指名手配犯を捜査しているのと変わらんではないか」
男「はい。我々記者にとっては、一大スクープの種ですからね。みんな躍起になっているのです」
銅「まあ頑張ってくだされ」
男「ありがとうございました」
そう言い男は去って行った。
銅次郎は山に入る途中、海岸にも立ち寄った。
案の定、そこにも記者の姿が多く見られた。
銅次郎は大きく息をつく。
浦島が無事に戻ってくることをただ祈るのみであった。

深夜になり、銅次郎が寝ていると、誰かが入ってくる音がした。
目を覚まし出て行くと、そこに浦島の姿があった。
浦「銅次郎さん。今戻りました」
銅「おお無事だったか！」
浦「はい」
銅「人には見つからなかったか？」
浦「はい。幸い誰もいませんでした。しかし海岸に沢山の足跡があったので、人に勘づかれないよう注意しました。本当に大変なことになってしまいました・・」
銅「記者たちがあんたを探しまわってるようだ。こうなってしまった以上、下手に動かないほうがいい」
浦「銅じいさんの言いつけを守れませんでした」
銅「仕方なかったのだ。問題はこれからどうするか・・」
浦「私は竜宮城に行くことにしました」
銅「それでは、ついに行く手立てを見つけられたのだな？」
浦「はい」
浦島は顔を輝かせた。

翌日。
夜明けと共に、二人は海岸に立っていた。
銅「ついに行ってしまうか・・」
浦「いいえ。まだ正確な日時が決まっているわけではありません。私はここで、その時を待ちます」
銅「そうか」
浦「銅次郎さんには本当に感謝しています」
銅「寂しくなるが、これで我が代々の役目も終わる」
浦「私は竜宮城に行っても、あなたのことや、ここで出会った人達のことを忘れないでしょう」
銅「私もだろう。乙姫様を大切にな」
浦「はい」
涙をにじませる浦島。
早朝ということもあり、静かな海であった。
二人はしばらく思い出話に浸っていると、その静寂を壊すものが。
「あ、あなたまさか！　浦島さんでは！？」
ついに記者に見つかってしまった。
記「やっぱりそうだ！　探していましたよ～」
しまった・・　見つかったか・・
後悔したが遅かった。
記「浦島さんお話を伺いたいのですが、ご同行頂けますか！？」
浦「申し訳ない・・　今はここを離れられません」
記「そう言わずお願いします。世界中の関心があなたに集まっています」
浦「しかし・・」
浦島がたじろいでいる内に、記者がひとり、またひとりと集まってきた。
逸早く連絡を聞きつけたようだ。
「浦島さん！　先日までハワイにいたはずのあなたがどうしてここ

に！？」
「ＬＤプリオさんの島から突然消えた島について何か知っていますか！？」
「あなたは童話に登場する浦島太郎本人ではないかという噂がありますが！？」
「お答え頂けますか！？」
嵐のような質問攻めが始まった。
早朝から海岸は騒然としだした。
浦島は返答に困った。
だが海を背にしている浦島に逃げ道はない。
次第に追いつめられていく。
そんな時だ。
どこからか。
透き通った声が浦島の耳に・・・　違う。心に直接呼び掛けるのを感じた。
「浦島さん。こっちです！」
それは紛れもなく海からであった。
他の者には聞こえないようだ。
浦「今のは？」
気のせいかとも思ったが・・
「浦島さん！　早く！」
浦「そうか。やはり間違いない」
浦島の中で何かが確信に変わった。
すると突然、記者達に背を向け、海に向かって走り出した。
記「ちょっと浦島さんどこへ！？」
記者達も追いようがない。
浦島は構わず突き進んだ。
やがて海水が腰のあたりまで達した時、勢いよく海へダイブした。
記者は慌てる。
「おい逃げられてしまうぞ！」

「落ちつけ！　人魚ではないのだ！」
しかし彼らが次に見たのは、まさに目を疑う光景であった。
海中から、およそ２０匹近い亀の大群が一斉に姿を現したのだ。
中央の一番大きな亀の背に浦島の姿はあった。
「なんだこれは！？」
２０匹の亀に睨まれた数人の記者達は、たじろいだ。
金縛りのように身動きができなかった。
やがて亀達は静かに方向を変えると、ゆっくり泳ぎ出した。
同時に周りの１９体の亀から不思議な泡が現れ、それは宙を漂い、中央の浦島を背負った亀の周りを優しく包んだ。
泡はやがて大きくなり、浦島の体もすっぽりと包み込み、虹色に輝いた。
そして亀は海の中へ消えて行った・・
その光景に開いた口がふさがらない記者達。
時間が止まったかのよう。
しばらくして、記者の一人が小さくつぶやいた。
「間違いない・・　浦島太郎だ」
続いて我に返った一人が。
「ちょっと！　浦島さん待って下さい！！」
数名が慌てて後を追うが、時すでに遅し。
「あれは本物の浦島太郎に違いない！　後を追え―！」
「無理です！」
「そうだ！　誰か今のを撮影したか！？」
「いいえ。見とれてしまい・・」
「バカもの！　こんな決定的スクープを逃すやつがあるか！」
「ああ大変だ～」
「そうだ！　ここにいた老人はどこへ行った！？」
「あれ？　さっきまでここにいたのに」
「浦島と亀に気を取られているうちに逃げられたか！　クソ！　まったくこの役立たずが！　老人はいいから、早く浦島を追う手はず

を整えろ！」
「はい！」
静かな海岸は一転、慌ただしさを取り戻した。
その様子を山の木陰から見ていた銅次郎は、クスクスと笑った。
そして、浦島が旅立った海をしばらく眺め、静かに目を閉じ、浦島の幸運を祈ると、ねぐらに帰って行った。

## 最終話　旅立ち（後書き）

最後までお付き合いくださりありがとうございました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7179n/

浦島太郎は生きていた

2010年11月11日06時57分発行